

アルケイアー記録・情報・歴史
第一三号 二〇一八年二月 一―四四頁
南山アーカイブズ

学校史とは何か

―地域のコミュニティセンターとしての学校の姿―

和崎 光太郎

京都市学校歴史博物館

Theory and Method of the School History : A Case of Schools in Kyoto

Kyoto Municipal Museum of School History

WASAKI Kotaro

Archeia: Documents, Information and History
No.13 November, 2018 pp.1-44
Nanzan Archives

はじめに

一 学校史とは何か

二 京都の学校史

三 番組小の開校

四 番組小の役割

五 番組小の運営

六 番組小の在籍生徒と教育内容

おわりに

学校史とは何か

―地域のコミュニティセンターとしての学校の姿―

和崎 光太郎

はじめに

こんにちは。和崎です。よろしくお願いたします。もうこの建物に来て二時間ぐらいたつでしようか。すごくいい建物でそちらに目が行ってしまつて、いろいろうろろと見学させていただいています。

僕の仕事は学芸員です。日本の学芸員というのは世界の中では非常に希で、「なんでも屋」的な動きが求められます。まず、キュレーターですね。展示を作る仕事をします。あと、エデュケーターもしますし、資料の収集や保存ももちろんします。他に、資料を整理してアクセスできるようにする、これはとても難しく、しかもとんでもなく時間がかかる仕事なんです。この仕事もする、つまりアーキビスト。他にもいろいろ幅広く仕事をやっていますが、学芸員としての仕事すべてに共通するのはただ一つ、資料を扱い考える、ということです。たまたま、今日のように外に出て歴史的な建築物を見て、そして展示を見学させていただいて、非常にいい刺激になる日も必要です。

僕がフィールドにしているのは京都市です。京都生まれでも京都市育ちでもないのですが、京都でたまたま仕事をさせてもらっています。京都の町というのはいろいろな特徴があります。例えばお寺が多いですね。あと神社もあります。伏見稲荷大社という有名な神社もあります。自然も豊かですし、誇るべきところは多々あるのでしょうか、その内の一つが、実は学校なんですね。学校は一般的なイメージだと勉強するところなのですが、京都では明治二（一八六九）年から、地域づくりの中心だった。学校を中心にして活動していた学区の自治組織が、地域づくりを担ってきたという点で注目に値するのですが、そういった視点で学校を見る人は実は少ないのです。



写真①

分かりやすいですね。「地域のコミュニティセンターとしての学校の姿」。例えばこの写真（写真①）。これは今から百年少々前の小学校です。上に何か乗っています。あれ何だと思いませんか。見張り台みたいですね。まあある意味、見張り台です。火事がないかどうか見張るためのものなので、火の見櫓やぐらや望火楼ぼうかろうと呼ばれます。

火の見櫓を作った後に、もう一つ使い道が出てくるわけですね。地域に時間を知らせる太鼓を打つんです、なので太鼓望楼ぼうろうとも呼ばれます。江戸時代に時間を知らせるのは基本的には城下町だとお城で、太鼓を叩いて知らせるんです。お城がないところだったら、寺が大体その役割をして太鼓を叩いて知らせるのですが、明

治になってそれを学校でするようになったというのは、まさに地域の中心として学校があったということ、この望楼はそれをよく表すものです。

今日は二本立てです。メインタイトルの話は何もしていませんでしたが、「学校史とは何か」、普通、学校史というと、例えば「南山大学の歴史」というと南山大学のことを延々とたどっていくわけです。僕の言う学校史は、そういう意味ではなくて、もっと積極的な、特別な意味を学校史という言葉に託して、京都市内のいろんなところで学校史の講演をこの一年ぐらいでやるようになってきました。ただ実際は学芸員になって七年目なわけですから、学校史という自分の考えのようなのを一度きちんとお話しさせていただければなと思って、この場を選ばせていただいたということです。これが今日の前半部分です。

後半部分は、この学校史という視座から、具体的に京都市を事例としてかいつまみながらお話しします。でも、そもそもなぜ京都市の学校史なのかをご説明する必要があるのです、先にここで少しかじりましょう。

まず、この新聞記事（『京都新聞』二〇一四年十一月十五日朝刊）。記事を読んでみますと、「児童数一二〇〇人以上の大規模校、御所南小の校区にある竹間学区自治連合会」という言葉が出てきます。京都に引越してきたばかりの人は、これはもう頭の中にハテナがたくさん出てくるんですね。なぜかという、御所南小学校の校区の中に、竹間学区、別の名前の学区がある。校区の中に、学区がある。これは何なんだろうということになります。ちなみに校区も学区も、どちらも英語に直すと School district なわけですよ。だから英語に直してもわからない。摩訶不思議な現象が起こっている。

記事の右上のほうを見ると、「中京の二十三学区」とあります。これ、名古屋圏では「ちゅうきょう」と読むのでしょうか、京都では「なかがきょう」と読みます。中京区というのがありまして、その中京区の二十三学区という

京都市内の学校と地域とのつながりを考えるにあたってキーワードになるのは、校区ではなくて、学区です。校区は、文字通り学校のことで、単なる通学圏を意味します。一方で、京都市の学区は、単なる通学圏ではないのです。校区と学区が重なるところもありますが、重ならないところもたくさんある。学区というのは、歴史的に紐解いていくと、室町時代以来の、もう少し詳しく言うところと応仁の乱があつて、京都が焼け野原になつて、そのしばらく後に天文法華の乱というのがあります。こちらのダメージがまた大きいのです。もう自分たちで守らざるを得ないということ、この天文法華の乱の後に町の人たちが武装して、各町がタッグを組んで町組ちやうぐみというのをつくるんですね。町組ちやうぐみというのは、複数の町が連合した自治組織なんです。ですから時代的に言うと、今からおおよそ五百年弱前に町組ちやうぐみというのがつくれ、なんと学区は、その伝統を今でも持ち続けています。

この町組、江戸時代になつても、姿や役割を変えながら、一応ずっとあります。それが、明治初年に学区制小学校がつくられることになつたときに、町の組み合わせを変えて、つまり町組が再編されて、各町組に番号がふられたので、番組ばんぐみと呼ばれるようになります。つまり、学校ができて学区を決めたのではなくて、元々町組があつて、その町組の組み合わせを変えたり規模を整えたりして番組にして、各番組に学校を置いたわけです。この番組が、明治期の中頃に学区という名称になります。だから、学区というのはある意味、学校ができる前から自治組織としてあつたわけです。学区が先、学校が後。なので、学校が統合しても自治組織である学区は統合されないんです。こんなことをよく聞かれます。「学校がなくなつたのに、なんで学区はなくならないのですか」。なぜこういう問いが立ち上がるのかというと、たぶん名古屋でもそうだと思うのですが、ドーナツ化現象やら少子化やらで、街中で学校統廃合が結構進んでいると思うんです。学校統廃合が進むと、地域共同体が崩れていくんじゃないか、といった思いから、このような質問が出てくるんだと思います。逆に、学校統廃合を進めても地域共同体を維持するに

は、どうしたらいいのか、ですね。

京都市では、もう三十年以上前から都心部の小学校の児童数減少が顕著で、二十年以上前から大規模な学校統廃合が進みました。さきほど見たのは、高倉小学校の創設二十周年記念誌ですね。二十年ちよい前に、複数の小学校を統合して一つの学校にしたのです。繰り返しになりますが、学校は統合しても学区は統合しませんから、学区がこうやって残っているんです。校区は通学圏なので、学校にあわせて統合されます。学区はあくまで自治組織の単位なので、変わりません。なので、学校を統廃合することによって、一つの校区に複数の学区があることになるんです。学区は、名前は学区なんですけれど、実態としては別に学校があるうがなろうが変わらないという組織なんです⁽³⁾ね。

では、なぜ学校がなくなっても学区はなくならないのか。単に、例えば中世以来の町組の伝統を引いているからなくならないんですよと、こう言うだけだったら簡単なんです。ただ、じゃあ全国各地同じように中世以来の村や町はなくならないのかというと、ご存じのようになくなりますよね。明治中期にも昭和三十年代にも大合併が行われていますし、近いところではいわゆる「平成の大合併」がありました。人口減少と都市への人口集中が進む昨今では、特に村の消滅が現在進行形です。一方で人口が流入してきた都市部では、昔ながらのヨコのつながりが失われていき、個人が自治体とのタテの直線的なつながりしかないような状況になっていっているんじゃないでしょうか。

では、京都ではなぜ、学校が無くなっても学区という地域共同体が生きつづけるのか。もちろん色々な要因があるのですが、とりあえず、京都のこと、特に学区の原型である番組が誕生するあたりからのことをきちんと理解しておかないと、この問題の答えは出ないのです。

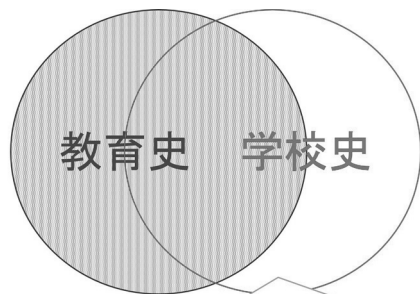
その歴史的な歩み、なぜ京都では学校がなくなっても学区はなくならないのかという問いのもとでの学校と学区の歴史的な歩みを知るためには、学校の教育機関としての側面だけを見ては分かりません。ということ、何年前前にあることを思いつきました。それが、学校史です。

一 学校史とは何か

僕は元々、というか今でも、専門は何かと聞かれたら、教育史と答えます。教育史というのは、学校に限定されることがない、教育全般の歴史を扱います。例えば、家庭教育の歴史も扱いますし、生涯学習のことも扱うわけです。そもそも今日的な意味での「学校」³なんていうものがこの世に存在しなかった頃、例えば江戸時代のいわゆる寺子屋や、ヨーロッパの宗教改革期のルターの思想なんかも、今日的な意味での「教育」⁴に関係するから教育史の対象になるわけですよ。

この教育史に対して、というわけではないのですが、独自の領域として、学校史を定義します。学校史とは何か。単に「家庭教育や生涯学習を抜きにして学校教育だけ扱います」、ということではありません。そうではなくて、そもそも教育という限定をとつばらって、教育以外の部分も含めた学校のありのままの姿を見よう、ということですね。要するに、教育に限定されることのない、学校全般の歴史です。

教育史と学校史を円に描いてみます（図①）。教育史という範囲は左の色がついた円です。学校史が右の色がない円です。このように学校史には、例えば建築学とか、地域との関わりとか、学校のまわりに住んでいる人々とか、教育とは直接関係ない部分があるんですね。この部分は教育史には入らないんです。



この「教育史」からはみ出る領域は、「地域史」や「建築史」、「社会史」など様々な分野で論じられてきた。

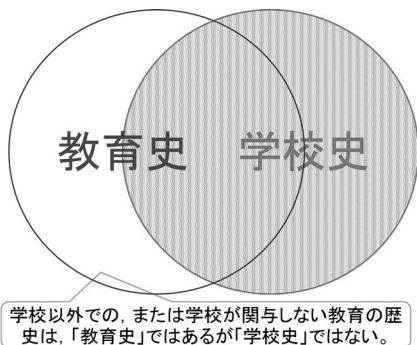
図①

例えば、この南山アーカイブズの建物がありますね。この建物のことを考えるというのは、無理矢理こじつけたら教育史にはなりますが、たぶん教育史の本流であるどういう教育をしたのか、何を学んだのかということにはつながってこないんですね。先ほど永井（永井英治）先生から聞きました、この建物はいろいろな学校で使い回しているらしいですね、とても興味深いです。教育史としては論じられないでしょうが、学校史として見ると、南山学園全体の中でのこの校舎の位置付けや、建築的な価値や、近所の人がこの建物をどう思ってきたのかという研究テーマが立ち上がってくるんです。それが学校史なんです。

京都の学校建築について、博士学位を取って本も出版されている先生^③がいるのですが、その先生は建築史が専門なんです。大阪の学校建築についてもついで最近本を出されました。でも、それらの本では教育について論じたり、建築の教育的意義について考察したりしているわけではありません。なので、これは教育史ではない。でも、おもいつきり学校史ですよ。あたりまえですが、教育史だけで見ていると、学校の姿全体が分からないんです。学校史とは、こういう考え方なわけです。

逆に、教育史に含まれるけど学校史からは外れる領域も、もちろんあります。図②を見てください。学校以外での、または学校が関与しない教育の歴史研究というのは、教育史学ではたくさん積み重ねられています。

でもやっぱり、よくよく気をつけないといけないのが、学校史の円と教育史の円が重なっていますよね。つまりですね、学校史をやる上で教育史の基本的な知識は欠かせないし、教育史をやる上でも学校史の基本的



図②

な知識は欠かせないんです。両者の違いばかり強調してお話ししていますが、このことは肝に銘じておかねばなりません。⁽⁶⁾特に日本は、学校教育の力で近代化してきて今の世の中をつくったような国ですから、教育を語る上での学校、学校を語る上での教育は、どちらも欠かせないんです。

次の話に行きましょう。この二つの図で学校史の領域を確認しましたが、僕の考える学校史は単なる研究領域ではありません。研究方法としての学校史を、三つの意味で考えています。

まず一つ目。文献資料に限らず、学校に関係するあらゆるモノを資料とする歴史学である、ということなんです。これは最初に言っておかないといけません。ちなみに歴史学というのは、一般的に日本で歴史学というと、文献史学がイメージされます。要するに文字を読んで、文字情報を基に歴史を組み立てる歴史学ではないのですが、歴史学をもうちょっと広い意味で考えていて、例えば考古学や民俗学を含みます。考古学というのは、要するにモノの情報をくみ取っていつて歴史を組み立てていくわけです、あと民俗学、これも主な研究対象はモノですが、モノだけではなく風土やら何やらいっぱい研究対象に入ってきますよね。少なくとも、この考古学と民俗学も含む広義での歴史学である、ということです。文献史学、考古学、民俗学などをフルに動員した意味での歴史学、研究対象もそうなんですが、方法的にもフルに動員して学校史をしなければいけないだろうなど。これは先ほど言ったように建築史だとか、あと学校を地域全体として見るようなのかとか、民俗学的に学校を見ると、じゃあどういふ風に位置付けられるのかといったことは、よくよく

考えていかなないと本当はいけないのです。今のところ私なんかは文献史学しかできていませんから、学問の領域を超えていろんな人が集まってやっていかないといけない。学校史をやるとなると、根本的に扱う資料や扱い方まで、幅広く勉強して、他の方から学んでいかないといけないのです。

歴史学であるということの意味は、もう一つあります。単に「こんなところにこんなことがありました」と新しい発見をすればいいだけではない、ということ。そもそもそんなものは無限にありますよね、例えばこんなところにこんな面白い学校がありましたとか、こんな面白い形の黒板消しがありましたとか、学校のトイレでこんなユニークなものがありましたとか、そんなものを発見していたら無限にあるので、それは確かに面白いし興味は尽きないのですが、それだけでは博物館での展示にも学問にもならないのです。そうではなくて、展示するなら同時に「他のモノを展示しない」という判断をしているわけですから、その判断のもとになった考察や歴史的なこと、自分がその資料に見出した価値^①などを、きちんとまとめ、必要に応じて解説を書かないといけない。学問にするなら、ある事実がわかったとして、その事実が歴史的にどのような意義を持つのか、従来の歴史をどのように塗り替えるのか、または補強するのか、どのような新しい歴史をつくるのか、などといったことを追求しなければ学問にはならないのです。先の例で言うと、例えばこんなおかしな形の黒板消しがありました、で終わるのではなくて、じゃあ、そんなおかしな形の黒板消しがあることによつて、教室空間の歴史をどう再考できるのかとか。その黒板消しは、黒板消しを初めて見る村人にとってどのような意味を持ったのか、とか。学校のトイレなら、例えばトイレが水洗化されたというのは、トイレの歴史全体や都市史の文脈でどういった意義を持つのか、とか。こういったことを実証して、考察して、結論を導き出すのが、歴史学なのです。要するに、通史という大きな流れがあつて、それをどう書き換えるのかとか補強するのかとか、通史のどの部分に位置づけるのか、歴史的な空間をどうより具体

的なもの、イメージしやすいものにするのか、そういう位置付けができて初めて歴史学になると思っています。「調べたらこんなことがありました」は、あくまで趣味です。趣味は趣味で結構なのですが、僕の言う学校史というのはあくまで歴史学の一分野であって、こんな魅力たっぷりな学校史の世界を単に趣味の積み重ねに終わらせてしまっていては、とんでもなくもったいないなと思っています。

僕も学芸員をやっていると、なぜかよく学生の指導というかアドバイスをする羽目になるのですが、学生に「なんで学校の歴史をやるの？」って聞くと、「面白いからとか興味を持ったからと答えるんですね。それはそれでいいんです、間違っていないんです。ただ、その自分の「面白い」や興味で始めたテーマについて、きちんと実証性をもって研究できるのか。これは、実は結構できるんです。問題は次の段階、研究の意義なんですね。「あなたにとっては面白かったかもしれないけれど、他の人にとつての意義は何なんだ」と。論文を書くときはそれが伝わるようにしないと読み手はつまらないと、アドバイスするんです。他の人にとつて「読んでよかった」「なるほど」となる結論を少しでも出そう、そうすると研究になるんだと、そういう説明をします。卒論ならまだしも、修論を書くなら、そういった意義付けまでしないといけないなと思っています。ここまで到達すると、歴史学としての学校史かなと思います。

次です。学校史という方法の二つ目。教育と関係あるかないかをいちいち考えない、です。僕みたいな、一見何をやっているかよくわからない研究者は、「自分がやっていることは教育史なのか？」と一度は自問自答したことがあるんじゃないかと思います。だって、教育史学会で発表するんですから、教育史ではないことを発表されても困ります、それはサッカー場でいきなり野球を始めるようなものです。だけど、学校史をやっている時は、教育史をやっているわけではないので、「これは教育史なのか？」と問わなくてすむのです。これはちよつと慣れてい

ないと、特に僕みたいに不器用に研究をしてきた人にとっては、慣れていかないといけないことだなと思います。うまくまとめられませんが無となく教育史の方法だなあつてのがあるんですね、その方法からも、学校史は自由になれる、というかならないといけません。

—実はこの意味での学校史と近い試みをしてきた先駆者を、一生懸命探したんです。確かに、学校史という言葉や論文のタイトルや本文中で使われている方というのは、いらっしやるわけです。例えば、花井信さんという教育史学の大先輩が、学校史という概念を使っておられます。花井さんの研究から学ぶところは非常に多いです。この二冊の本で、特に学校史という言葉を意識として使われています。一冊目は『近代日本地域教育の展開』（梓出版、一九八六年）、静岡の自治体史を編さんするお仕事をされて、その後でそこで培われた経験や知識、資料などを使って書かれています。もう一冊は『山峡の学校史』（川島書店、二〇一一年）、これは最近出された本ですね。ただし、花井さん自身が、ご自身の研究はあくまで教育史の一環としての学校史である、と説明されています。やっぱりどうやら、今日ここで話しているような意味で学校史を定義づけたり語ったりしている人は、いないようなんです。

次、方法としての学校史の三つ目です。三つ目で終わりです。三つ目は、視野を広げようということです。学校史というとなんだか学校内のことばかり研究してそうですが、そうじゃない。学校内だけではなく、学校が学校外に与えた影響、すなわち学校の「威力」全般を射程に収める、ということなんです。どういうことを言っているのか、少し説明しましょう。

例えば、ある地域に学校ができました。学校ができたことによって家族や地域がどう変わったのか、という問いが立ち上がります。例えば、イエや家族は、新しくhomeの訳語として誕生した「家庭」という近代概念でとらえ

られるようになります。どういうことかというのと、明治三十年ぐらいになってくると、学校で教員が児童・生徒に對して、家に帰ったらこうしなさい、ああしなさいと指導し始めます。教員は、親にも直接口出しするようになります。そんな中で、家庭という概念が定着していくのですが、それは学校と家庭との連絡、といったフレーズの定着とほぼ同時進行だったのです。ちなみに、通知表や通信簿など、いろんな言い方がありますが、通知表は、この過程で生まれます。通知表は、教員から親への通知ですから。そんなこんなで、教育する場所として家庭空間というものが立ち上がり、成立していくわけです。

その明治三十年代に母親が子どもを教育するという、日本の歴史上、大転換期がおとずれます。江戸時代に母親向けに書かれた子どもの教育書なんてほとんどありませんからね。かの有名な『女大学』にも子どもの教育については書かれていません。つまり期待すらされていないのです。理由は単純です。「母親が子どもの教育をする」と甘やかすから駄目だ、なんです。だから日本の武士は、徹底した父親の教育で成り立っているわけです。

では武士以外はどうですかと、大学の授業でこの話をしたら聞かれるのですが、例えば商人だったら丁稚奉公として住み込みで学びます。農民はそもそも親が子どもに教育なんてしません。お手伝いばかりです。お手伝いが子どもを成長させていくわけです。ですから家で教育をするという発想がないし、そもそも「教育」という概念が江戸時代後期になるまでほとんど流通していません。

明治五（一八七二）年から翌年にかけて、学制という教育法令が出ます。二百章を超える大部な法令です。でも、学制の本文には「教育」という言葉は四回しか出てきません。つまり、学制を教育法令だとして理解するのは、後世からの目線なんです。明治ゼロ年代後半になって、一気に education の翻訳語としての「教育」が広まって、明治十二（一八七九）年には学制が廃止され、なんと早くも教育令が出されます。ただ、意味はかなり変わっていま

す。education というのは元々 educatio、人の能力を引き出すという意味なんです。その意味が大切なんです。その意味が失われた形で日本で「教育」として広まります。

話がかなりふくらみましたけれど、こういう風にして家庭があたかも昔からずっとあったような感じに思われるような世の中になる。そのプロセスについては先行研究がありますが、⁽⁹⁾ 僭越ながらこれも実は、僕は学校史の一部だと思っんです。要するに学校の影響力を受けて、家庭が立ち上がっていった。地域なんてもう激変しますよね。学校ができて激変するし、学校が無くなっても激変する。それが学校の威力であって、その威力の歴史を研究するのも学校史なんです。

あと、学校ができたことで、大人が子どもを見る眼差しも変わります。要するに同じ十歳といっても一八〇〇年の時点での十歳といったら、もう立派な労働者ですよ。それが一九〇〇年の段階での十歳というと、小学校を卒業する年なんです。当時小学校は四年制ですから。この変化は、大人が十歳の子を見る眼差しに大きな影響をもたらるんを与えるでしょう。こういうのも学校史だと僕は思います。とまあ、いろんな例を出しましたが、要するに日本は学校の力で近代化した、国民国家になっていったと言っても過言ではないような国なわけですから、学校の威力の歴史的な考察というのは、日本近代史を考える上で必要不可欠なんです。

ちなみに僕は偉そうに「学校史とは」とか語っていますが、まだまだ駆け出しです。『学びやタイムスリップ』⁽¹⁰⁾ という本を去年出しまして、これは『京都新聞』で連載していたものをまとめた共著で、僕が学校史を書いて、もう一人美術史を書いた人がいて、二人で書いています。この本が初めて僕が学校史という言葉積極的に使った場として、なぜ学校史というのかをあとがきにも書きました。もう一冊、今年（二〇一七年）の三月に、『明治の（青年）』⁽¹¹⁾ っていう本も出しました。これは、昨年僕が書いた博士学位論文をそこそこ加筆修正して本にしたもので、「青

年」という概念が近代学校制度の産物であったことを論じた本です。この本のあとがきでは、さつきお話しする中で何度か出てきた学校の威力を研究することの大切さを語っています。

二 京都の学校史^②

もうすでに三十分しゃべっていますが、今日はサブタイトルにあるとおり、京都の話もしていきます。「なぜ京都の学校史なのか?」。たまたま僕が七年前に京都の博物館に就職したから、というそんな消極的な理由だけではなくて、積極的な理由もあります。先ほどご説明した通りです。ただ、個人的には、学校史をやる上でこの地域でもいい、むしろ地産地消の学校史でいい、むしろその方が、無理やり国家との関係を語ろうとしていびつになるよりも、リアルな姿、より地に足のついた姿になるかと思っています。地域の方々にとって生きた学校史になるんじゃないかなと思います。

京都の学校の特徴は色々ありますが、そのうちの一つが、最初に少しお話しした、番組小学校です。略して番組小と呼ばれます。ちなみに皆さんはこのあたりに住んでいらつしゃると思いますけれど、「義校」ってご存じですか。あまり知名度が高くないかと思います。実は番組小と並んで歴史があります。明治三年に、今でいう岐阜県と愛知県の人たちが自分たちでつくった学校です。国の法令が出るより先につくったんです。全部で何百校があったようです。

ただ知名度としては番組小のほうが圧倒的に上で、一年早いだけなんですけれど、この一年というのは結構大きいなと思っています。

番組小とは何なのか。明治二年に京都の上京・下京に六十四校創設された、日本初の学区制小学校です。ただ、当時の上京と下京は、今の京都市の上京区・中京区・下京区よりもかなり狭くて、一部は今は左京区と東山区になっ

ていたりします。

今の小学校も学区制ですよ。例えばここで育った子は近くの小学校に入学します。住んでいる場所で、入学する学校が決まる。江戸時代の日本人の発想には、これがありません。そもそも一九世紀初頭には、まだヨーロッパにもアメリカにも今みたいな学区はありませんけど。では、一八六〇年代末に京都でなぜ学区制度が始められたのか。たぶん後でもう一回出てきますけれど、福沢諭吉が『西洋事情』という本を書いて、西洋の小学校を紹介します。それが発端です。ちなみに江戸時代には、小学校はありません。寺子屋というのはお稽古塾ですから、いつ入ってもいいし、いつ出てもいいし、そもそも全部個別指導です。学校のような集団授業なんて、寺子屋ではしません。

ちなみに、ではなぜ西洋は日本に少々先行して学区制度をやっていたのかご存じですか。学区というのは、とんでもなくおおよっぱに言うと、元々教区です。教会の教区があって、六〇〇年くらい前の中世に、教区の中で学校をつくっていったんです。だからヨーロッパではもう中世から、ある意味で学区っぽいものがあるとも考えられるんです。

話を京都に戻しましょう。番組小というのは、さつきも少しお話しましたが、室町後期以来の自治組織である町の連合体である町組を、明治初期に二度再編して番組にして、原則各番組で小学校が創設された。詳しく見てみましょう。

近世の町組は、大きさが様々、上下の格付けもあり、位置も飛び地があったりしてバラバラだったので、明治初

年に学校を設置するにあたり、再編されます。その際に、かなり再編されたので組の名前も変える必要がでてきます。そこで、町組に番号を振るんです。上京と下京それぞれに、機械的に北西の方角から一、二、三、四、五、六・・・と振っていきます。一番組、二番組、三番組となるんですね。で、各番組の中に一校ずつ小学校が創設されていきます。それで番組小学校と呼ばれるんですね。

ではなぜ京都に番組小ができたのか。幕末の京都は、まず一八五三年にペリーが黒船でやってきて、いわゆる「開港」をします。開港して輸出を始めたことによって、日本の経済は大混乱に陥ります。高校で五品江戸廻送令を習いますね。あの辺です。生糸の輸出が開始されて、京都では西陣が一気に衰退します。糸がなければ服が作れないんです。廃業して、西陣を離れて、南の下京、東本願寺、西本願寺の周りに移住します。あの辺は東西本願寺の本家本元なので旅行者が多く、旅館業をやるために移転していきます。

このタイミングで、下京がほぼ全焼する「どんどん焼け」という大火事がおこります。原因は、幕末の政争です。もうちょっと詳しく言うと、蛤御門の変です。これはもう本当にひどい話です。皆さんもどうですか。自分の家がありますね。自分の家にいたらあるとき全然知らない人が殴り込んで入ってきます。何かと思ったら違う人が殴り込んできて、家の中で二人が喧嘩をし始めます。喧嘩をし始めて最後に火をつけて出て行きます。みなさんは、全焼した我が家のあとにポツンと残されます。これが、幕末の京都です。長州、会津、薩摩にもそれぞれ事情があるのでしようが、京都にとってはただただ迷惑なんです。例えば大河ドラマで、会津とか薩摩とか長州とか格好よくやっていますけれど、これ完全に外から目線ですよ。幕末の政争は、京都の町人にとっては多大なる迷惑なんです。今すぐ出て行けというのが本音でしょうね。まだあります。「どんどん焼け」が終わったら、次、大暴風雨に見舞われます。もう踏んだり蹴ったりです。最後のトドメは、遷都の噂です。幕末の京都は、もう本当に災難続

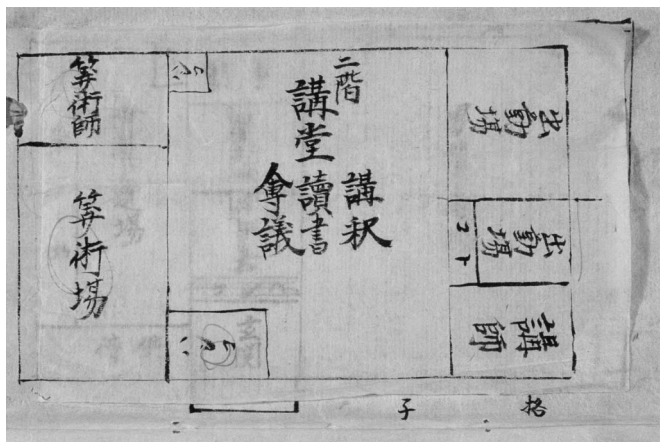
きなんです。京都市中は壊滅的な打撃を受けます。この壊滅的な打撃から立ち直るために明治二年に六十四校創設されたのが、番組小なんです。

では、こんな経緯で創設された番組小は、いったいどんな学校だったのでしょうか。番組小が果たした役割を簡単にお話しましょう。

一つ目が、今日的な言い方にはなりますが、新時代を担う町人の教育です。明治初年、これから新しい時代が来るというのは知識人にとってはもう分かりきっていたことで、だから新しい教育が必要だとなります。ちなみに、江戸時代の京都は、西陣を中心とした工業都市であると同時に、学問都市でもあります。学問都市であるからこそ、多くの出版社もありました。要するに江戸時代って、政治の中心は江戸、商売の中心は大阪、学問の中心は京都なんですよ。だから出版社も本屋もたくさんありました。京都には、お公家さん相手に商売をする人たちがいっぱいいます。虎屋さんとか鳩居堂さんとか、蕎麦の尾張屋さんもそうです。お公家さん相手ですね。なので、特に本屋はそうなのですが、はっきり言って今で言う「教養」がなかったら物が売れないんです。商売相手が教養豊かだから。物を売ろうと思ったたら相手と同じぐらい教養がないといけないので、結局、教養が豊かな人が育つ。ですから、新しい時代が来たときにすぐ教育だ、となるわけです。新しい時代には新しい教育だ、この発想は、京都だからこそできたんだと思います。

二つ目の役割が、地域のコミュニティセンターです。明治初年にはまだ、町が壊滅的な打撃を受けているので、それを復興させなければなりません。そうなると復興拠点が必要になります。で、番組小は、「町組会所兼小学校」という、教育の場と地域自治の場が共存した施設になります。町組会所というのは、今でいう公民館です。府が示した小学校建営図面の二階部分（写真③）を見ますと、地域の人たちが集まる講堂というのが書かれています。こ

です。各番組単位での自治の中心が、学校だったのです。 올라上がった建物は一階建てのほうが多いです。二階建てなんかつくれないんですよ。復興途中ですから。だから一階建てが圧倒的に多いのですが、府は一応こういう二階建ての図面を出しています。



写真③

れが、「町組会所」です。

現在、京都の街中には公民館がありません。なぜかというと、いまだに学校とセットなんです。学校が統廃合でなくなってしまうても、元々の校舎の一部を公民館として使っていますし、その校舎がなくなっても元敷地内に建物を立てて、そこを使っているんです。ですから京都の街中には公民館がないんですね。

話を建営図面に戻しましょう。日本語の講堂ってすごく面白くて、宗教的な会所として講堂という言葉を使うので、仏教の建物にもキリスト教の建物にも講堂ってあるんですね。ちなみに学校にもあるのが京都です。講堂は、「講ずる堂」ですね。要するに人が話をする場所なわけです。番組小に講堂をつくって何をしているか。図面の講堂の下に三文字あります。左から順番に、会議、読書、講釈と並んでいます。まあ読書と講釈はいいですよ。本を読むとか、講釈というのは偉い人が来てしゃべる。会議というのは何をするのかというと、地域の人が集まって番組の運営について会議をするんです。ちなみにこれはあくまで府が出した図面ですが、実際に

では、この番組小をつくった後の番組は、どういう変遷をたどってきたのか。まず、名前を幾度と変えながら一八九〇年代に学区という名称になります。

この時の学区というのは、今の学区のイメージとは全然違います。学区市税があり、寄付金なども含めた学区有財産を持ち、その使い方を話し合う学区会議を開催します。学区会議を開催するときに学区会議員を選挙で選びます。こういうのを学区制度といいます。

要するに、単に学区で集まって仲良くしましょうとかやっているのではなくて、今で言ったら町内会費みたいなものを徴収して、その使い道を自分たちの中で話し合っていく。じゃあその使い道で一番額が大きいのは何かというと、教員の給料とか、校舎の増改築や新築の費用です。基本的に、京都府も、当時できたの京都市も、学校の建築には金を出しません。学校に関するあらゆることが、学区の出資になります。そういう時代なんです。

実はこの学区制度をやっているところ、全国で六カ所あります。北から順に、札幌、東京、横浜、なぜか名古屋はこれをやらずに、京都、大阪、神戸です。この六都市でやっています。

では学区が豊かなところは立派な小学校ができるのか。できます。財がそれほどない学区は学校もそんなに立派なものがないのか。そうなります。ですから、学区間格差が問題になって、全国では昭和元（一九二六）年には他は全部やめているのですが、京都だけは続きます。

なぜ続くのか。当時の京都市は、学区制度をやめることができず、かわりにお金がない学区に補助金を出す政策をとります。で、学区制度を存続させていくのですが、昭和十六（一九四一）年に学区制度が廃止されます。でも、京都が自発的にやめたのではないです。この年って分かりますね。Remember Pearl Harborの年ですね。ただあれは十二月です。学区制度の廃止は三月です。何なのかというと、日中戦争が始まって四年目なのです。日中戦争

は、最初はすぐ終わるだろうと思われていたようですが、結局泥沼化して、終わりが見えなくなりそうです。当時は総動員体制ですから、はつきり言って日本全体が共産主義、一部の例外を除いて私有財産を否定されて、「みんな平等」になるんです。貧富の格差を低い方にそろえて、とにかく無くして、金持ちをやっつけたりいじめたりする。国家レベルでこういったやり方をしているので、学区制度はダメだと、国の監査に言われてしまいます。で、学区制度廃止に追い込まれるわけですね。地域の財だった校地と学校が、市のものになります。これに学区側は猛反発します。学校から一気に物を引き揚げたりした学校もあるようです。ただ、当時はお国のために尽くすという雰囲気だんだん濃くなってくるので、まあ仕方ないということで学区制度が廃止されます。このときに、京都の学校は、ようやく正式に市立になります。例えば京都市明倫小学校だったものが、京都市立明倫国民学校になります。

一九八〇年代になると、学校統廃合ラッシュが起こります。京都の場合は少子高齢化よりもバブルのほうが影響が大きいかもです。このバブルというのは非常に怖くて、街中の土地の値段が急激に上がっていきます。そうなるたびに一回の固定資産税を払いますが、やってられなくなってくるんですよ。やってられなくなるとどうするかというと、あるときここにマンションを建てませんか、駐車場をつくりませんかと来るんですね。それで自分の土地の上を収益を見込めるようなものにして、自分自身は郊外に引越す、そういう人が大量に出てきます。それだったらお金もたくさん入るし、訳の分からない額の固定資産税を払わなくて済むわけです。これがバブルなんです。そうなると、京都の街中が空洞化して行って、子どもがいなくなります。子どもがいなくなると学校統廃合が進みます。

でも、学校がなくなって二十年以上たつのに、今でも学区は強い地域のコミュニティとして生き続けています。区民祭り、区民運動会、消防分団、自治連合会、社会福祉協議会、体育振興会など、学区組織がたくさんあります。

例えば普通、「区民祭り」といったら、こゝ（名古屋市昭和区五軒家町六番地）なら昭和区のお祭りだろうなあと、思われますよね。京都でも、引越してきたばかりの人は、「上京区のお祭りがな」「下京区のお祭りがな」ってなると思うんです。まさか、二十年以上前に閉校した学校の「学区民祭り」だとは、想像できないと思うんです。下京区に引越して区民祭りがあると聞いて「ああ、下京区の祭りだ」と思ったなら「開智学区ですよ」と言われるんですね。開智学区って言われてもさっぱり分からないから、ヤフー地図で調べる、でも開智小学校なんてないんです。「あ、開智はね、二十何年前まであった学校の名前ですよ」って親切に教えてもらっても、余計に頭の中が混乱するわけですよ。「学校が無くなったのに、何で学区があるの・・・」ってなる。ちなみに、学区民の運動会やお祭りは、どこでやるのか。ほとんどが、元学校のグラウンドでやります。ではなぜそれができるのか。京都市の学校は統廃合してもその土地を民間に売ったことがまだ一度もないんです。絶対売らないというか、売れないんです。そもそも先ほど言ったように、元番組小は百五十年近く前から地元の人の出資でできていますから、たかだかできて七十年ほどの京都市教育委員会が、勝手に元学校の土地を売れるわけがないんです。ですから、地域の方々と話合って、元学校を使い続ける。そこにグラウンドが残るわけです。ちなみに僕が勤めている京都市学校歴史博物館も、元々小学校ですから、博物館のグラウンドで区民運動会や区民祭りが開催されます。博物館にグラウンドがあつて、そこで地域の夏祭りなんて、こんなすばらしいこと、たぶん全国で唯一です。このとき来たお客さんはラッキーですよ。区民運動会もそうです、博物館のグラウンドでやっています。消防分団も博物館の建物にくっついてあります。年に一回、夜に博物館のグラウンドで消防車が訓練をしています。社会福祉協議会も学区単位であります。体育振興会も学区単位であります。だから何々学区ゲートボール大会とか書いてあるポスターが、街中のいろんなところに貼ってあります。博物館に日曜日いらっしゃっていただくと、運が良ければ地域の方々のゲー

トボールを見ることができません。博物館のグラウンドで年配の方々ゲートボールをやっている、こんな光景はたぶん京都でしか見られません。ちなみに京都芸術センターという施設があって、そこも元学校なのでグラウンドでゲートボールをやっています。しかもそこは現代アートの建物なので、現代アートの彩られている中で八十歳ぐらいのおじいちゃんたちがゲートボールをやっているんですよ。シニールですね、これぞまさに現代アートです。

三 番組小の開校^⑤

では、いよいよ後半部分の本题に入ります。番組小の開校から見ていきます。実際、学校史をやってみようということですね。でも時間がもう少なくなってきましたから、ここからは手っ取り早くやってみます。

焼け野原からの復興途上だった京都に、どうやって校舎を建てたのか。まず、建物ごと寄付をしたケースがあります。これは鳩居堂のご主人です。鳩居堂ってご存じですか。京都ならではの文房具を売っているところですね。銀座にもお店があつて、あそこの前が日本で一番地価が高いところらしいです。鳩居堂さんというのは、もちろん元々は京都だけです。京都にあつて、天皇がちよつと東京に行くわなといつて行っちゃいますよね、その後に京都に店を残して、東京にも独立した店を出すんですよ。京都と東京に独立した鳩居堂を持って、京都を見捨てなかつたんです。東京の人は東京のお店だと勘違いしているらしいのですが、本家は京都のほうですよ。

全く違うパターンが虎屋さんです。なぜか。虎屋は、天皇がちよつと東京に行くわなつて言っていなくなった後、京都のお店を畳んで東京に行っちゃいます。でも、虎屋も、のちのち京都にお店を構えて、京都の老舗として大人気です。虎屋さんは文庫を持っています、そこにいらっしゃった方とお話ししたことがあります。しかも京都

の歴史館というところでの、公開シンポジウムです。磯田道史さんが最初に講演されて、続いて僕たち二人がしゃべって、最後に三人でシンポジウムというか座談会のようなことを五百人か六百人の前でやりました。この時に良く分かったのが、やっぱり虎屋は、別に京都を見捨てたわけではないということ。しょうがなかったんだと。確かにしようがないんです。お公家さんくらいしか食べないようなお菓子を売っていて、そのお公家さんたちが東京に行くんですから。鳩居堂は文房具です、たぶんお公家さん以外にも使う人がたくさんいます。だから事情が違うんですよ。東京の虎屋は、東京に移った明治期から、ずっと京都をリスペクトしているんです。その資料を見せられました。それで僕は納得したんです。ちなみに虎屋の羊羹はめちゃくちゃうまいです。ということ、何の話だったかという、建物ごとの校舎の寄付です、鳩居堂。

次、寺子屋の用地に新校舎を建てるパターンです。寺子屋をそのまま使わなかったんですかと言われるんですが、寺子屋はただの家ですから使いません。「町組会所」にするには狭すぎて話になりません。大体この最初の番組小って二階建てのケースも合わせて百平米ぐらい、三十坪ちょっとです。ですから、当時の家としては大きいです。今は、例えば家族四人で三十坪だったら、まあそんなものかという感じがしますけれど、当時としてはかなり広いです。ですから、この規模が必要なんです。一回更地にして新しく建てる。

あと、宗教施設ですね。宗教の会所の再利用。これが今僕が勤めている博物館の元の場所ですね。黒住教という当時の新興宗教があつて、その会所を買収して学校にしました。こんな具合に、番組小によって校舎は様々です。「番組小はこうなんだ！」みたいな単純化した話はありません。番組小は個性豊か、だから面白いんです。

次です、建築費はどうしたのか。まず、各番組の町人の醸金きょうきんで賄います。要するに金持ちが寄付することです。賄えない場合は府からの下付金です。下付金とは何なのかというと、貸すお金と貰うお金のことです。お金

を貰ったり借りたりします。ここで注意してほしいのは、府は軒割方式での集金だけは禁止します。要するに学校をつくろう！って決まってるから、各町とか番組内で一定額、例えば二千円ずつなら二千円ずつ全員で出しましょうとやってしまったところがあるのですが、それを府はやめると言うんです。理由は何か。理由は、資料として残っていません。ここからは歴史屋さんの解釈の仕事です。僕の解釈では、軒割方式で建築資金を集めると、完全に番組立の小学校になりますよね。でも、長州閩の京都府の役人たちは、自分たちが建ててやった学校にしたいんですよ。そうしないと自分たちが「お上^{かみ}」にならないんです。地域のコミュニティセンターを地域の人がつくりました、これだと府の存在感が全く無い。なので、名目上だけでも金を貸してやるとか言うんですよ。それを徹底して、でも府もお金をそんなに出せないから、志^{こころざし}はもらっておくとか資料に出てきます。志というのは、もう当時から寄付という意味がありますから、寄付金はもらいますという、そういう言い方をするわけですよ。府のジレンマがよく表れています。

では次、先生は誰だったのか、です。京都府は、宮家や藩士から教員に願い出る者が現れることを期待します。ちなみに国は寺子屋の師匠を小学校教員にすることは、原則禁止にします。理由は単純で、教える内容が全然違うんですよ。寺子屋の先生というのは、まず徹底的に書かせます。往来物という手紙を教材にして書かせます。子どもが書けるようになったら次に『実語教』『童子教』というのを読ませるんですよ。たいてい合冊になっている音読教材です。「山高きがゆえに貴からず、木有るをもつて貴しとす」で始まります。韻を踏んでいるんです。「書き」の教材の往来物は韻を踏んでいません。よく「読み・書き・そろばん」と言われますが、あれは明治初期の小学校の話ですから、そろばんは基本的にやりません。ほとんどの寺子屋が「書き・読み」をやって終わりだったんです。新しい学校はもちろんそれではまずいので、寺子屋の先生は基本的に雇わない方針だったんです。でも、少なく

とも京都では、行政側のいろいろな思惑が外れていきます。まず、教員に願い出る者がほとんどいません。結果として、番組小の当初の教員は、商人が断然多くなります。要するに商人の中で学問ができる人が教員になっていくんですね。例えば本屋さんとかです。

では、寺子屋はどうなったのか。国の法令としては寺子屋の教員の再雇用は禁止だったのですが、そもそも国の法令が出る前に番組小ができていますから、京都は寺子屋の師匠が実にうまく新しい小学校に順応します。そもそも、京都の寺子屋はレベルが高いのです。なので、あまり寺子屋という言い方はしません。手習所とか手跡指南所と言ったりします。寺子屋の師匠は京都では番組小の教員になったり、国が廃するよう言うので寺子屋を廃して私塾を開くなど、新時代にうまく順応していきます。

例えば、白景堂という日本で最大の寺子屋があります。弟子の数が四百名です。白景堂では古河さんという人が師匠をしていたのですが、この古河さん、弟子を小学校に移します。新しく上京十四番組小学校というのができるので、そこに移して、自分はその小学校の先生になりました。そういうことをやっているんですね。

次いきましょう。いよいよ開校式です。基本的に子どもは出席しません。そういうとみんな「は？」と言います。何なんだ、それはと。実は、番組小の開校式というのは学校設立にあたった地域の大人のための式なんです。記録を見ると昼間にします。ご飯のタイミングにするんですよ。これ理由分かりますか。わざわざご飯のタイミングで会を催すということは、すなわちお酒を飲みたいんです。だから今の開校式とは全然違うんですよ。おじさんたちが集まって酒を飲む会なんです。なぜなのかというと、番組小の用地・校舎は、番組小有志の寄付金に多く頼っていましたよね。なので、自分たちの学校ができたぞ、よし祝おう、という感覚だと思っんです。

これぞまさに、地域のコミュニティセンターとしての学校の姿なんです。大人と子どもの線引きというのは、

かなり明確なんです。学校とコミュニティセンターが一緒になつていくと、子どもと大人がごちゃ混ぜになつていくようなイメージがあるのですが、建物が一緒だけで、線引きは明確なんです。建営図面にも、子どもの場所と大人の場所が、明確に分けられています。

最初の開校は、上京と下京、それぞれの有力者が番組の長を務める学校で同時開校します。その後に、その番組の長が、それぞれ上京のトップと下京のトップになります。だから、上京と下京それぞれで同日に最初に開校したというのは、地域の威厳とか地域のシンボルというのをすごく象徴していたんだろうなと思います。

四 番組小の役割^①

いよいよ終わりに近づいてきました、地域において番組小はどんな役割を果たしたのか。一言でまとめれば、広義のコミュニティセンターです。先ほど「町組会所」って出てきましたが、会所としてだけではなくて、他にも色々やっています。まず徴税。戸籍の管理もしています。消防の役割も、警察の役割もあります。府兵の駐屯所にもあります。もういろいろなものが集約されるんですね。当時はまだ市制がひかれていなくて、京都市はありませんから、番組小が役所として、府の出先機関として、機能していたわけです。これぞ、地域のコミュニティセンターです。

番組小のこのような機能は、府が上から「お前らこうしろ」といって備わったんじゃないなくて、番組小創設までの過程で町人の意見を府が具体化することで実現しています。そのやり取りの資料は町文書として結構残っています。そのやり取りの中で、元々識者や府の役人が考えていた学校の姿から、だんだんと実際の番組小の姿になったんですね。コミュニティセンターとしての役割も備わるなら、むしろで金出して創ろう、となつたんです。要する

に、番組小の創設過程と初期の姿の背景には、美談にされるような町人の行いや精神力ではなく、非常にわかりやすい実利があったんです。ただ、その実利の中に、非常に先見性といいますが、近代的な、今日の京都の土台となるものがあつたんですね。

番組小が創設されて数年経つと、先ほどお話した望火楼が設置されていきます。これも町人の要望で実現します。なぜかという、そもそも大火事で京都は壊滅的な打撃を受けたわけですから、火事だけはもうやめてくれと



写真④

いう発想なわけですね。望火楼は、火の見櫓に加えて、学区内に時間を知らせる役割を持つわけですが、さらにそれに加えて、とうかそれら以上の役割を果たしたであろうことは、タワーの役割です。番組小は、番組内で最も高い建築物になるんですね。もう一度、写真(写真①)を見ましようか。で、次、これ(写真④)は同じ望火楼の現在の写真、三条京阪というところから見える元校舎です。現存する唯一の望火楼です。文化財指定を受けています。台風が来たら大丈夫なんかと思われでしょうが、昭和九(一九三四)年の室戸台風という観測史上最強クラスの台風に持ちこたえていますから大丈夫でしょう。

ともかく、番組小は番組内で最も高い建築物になって、地域のコミュニティセンターであることに加えて、地域のシンボルにもなるんです。タワーというのは、その地域のシンボルです。例え

ば、京都の五重塔はなぜあそこにあるのか。これは諸説ありますが、一説には大阪のほうから歩いてきて、あれが見えたら京都だとなるわけですね。心理的にあそこが見える範囲が京都なわけです。東京にも電波塔、東京タワーがあつて、新しいスカイツリーができました。あれがシンボル。たくさんの人が集まりますね。京都も、五重塔があるのに駅の北側に京都タワーもあります。大阪には通天閣というのがありますね、あれは電波塔ではないのです。番組小が、まさに地域のタワー、地域のシンボルになっていくことは、実は重要なことなんです。これは、教育史を考える上では全然重要じゃないことかもしれませんが、学校史を考える上では非常に重要なことなんです。学区において学校の役割が不動の位置を占めたと言つても過言じゃないでしょう。

この頃にはすでに番組という呼称はなくなっていますが、これ以降も学校は学区のコミュニティセンターであり続けます。これは、国の政策で、小学校で教育以外のことをするなというお達しが出てからです。政府はなんでこんなお達しを出したのか。明治十年代になると、自由民権運動が活発になります。小学校で民権演説をする人が出てきます。しかも十代になるかならないかといった少年たちまでも、演説します。よく中学の教科書にも民権派の人が演説してわつとやつて盛り上がりつつある挿絵がありますね。政府は、これを何とかして封じなければならぬ、となる。で、こう考えるんです。文部省第三十八号達というのを明治十四（一八八一）年に出して、学校施設を教育以外に用いることを禁止します。これは警察まで送り込んで徹底してやります。で、結局、京都の学校も教育以外で使えなくなるのかというと、番組小のコミュニティセンターとしての機能が府によって承認されて、その後も継続するんです。これは国がどう見過ぎたのか、もしくは何か葛藤があつたのかというのはまだ調べていないので分かりませんが、府は別にいいよと言います。ただ、背景として、京都の街中は民権演説が他に比べると大してなかつた。これも一つの要因でしょう。

以上のような役割をもった番組小は、周りの地域の学校のあり方に影響を与えていきます。まず、郡中ぐんちゆうです。当時の京都の郡部に、番組小をモデルにした「郡中小学校」というのを四十校以上設置していきます。最初に醍醐寺内に小学校ができます。醍醐寺は桜で有名ですね。その醍醐寺に三宝院というところがあるのですが、なんとそこに開校します。僕が知っている限りでは唯一、今国宝になっている建物の中で開校した小学校です。ちなみにそこを教室として十年以上使います。すごい学校ですね。

次の例に行きましょう。犬上いぬかみ県、今の滋賀県東部に、ヴォーリス建築で有名な豊郷小学校があります。犬上県自体は、廃藩置県のさ中にできて、すぐになくなってしまった県なのですが、この県の文書には、番組小を参考にして学校をつくろうという話が出てきます。

最後、大坂です。「さか」の字はまだこちらの坂ですね。今の阪になっていません。明治四年の大坂には、京都で下積みした藤村紫朗という人物がいて、彼が番組小のような校舎の小学校を設置していきます。

ちなみに藤村紫朗は、このあと山梨県に「藤村式」という小学校をたくさんつくります。長野県の松本から山梨に藤村式の学校を見学に来た人たちが、長野にかの有名な開智学校をつくります。開智学校の校舎は、主に東京の建物を参考にして造られるのですが、長い目でみると番組小の影響もあつたと言えるんですね。なので、旧開智学校の展示でも、番組小のことが触られています。

五 番組小の運営

ではどうやって番組小を運営していたのか。まず有名なのが、かまじきん竈金です。ここで言う竈かまじきんって、焼き物が焼ける大きいやつじゃなくて、家の中にある小さな竈です。炊飯ジャーみたいなものです。でも、竈はあくまで例えて、今の感覚で言うところの、戸籍の戸といった意味です。竈金とは、各戸が定められた額を番組小運営費として出資するものでして、明治二年五月、要するに最初の番組小開校と同時に始まります。

ではなぜ竈金というのか。明治初年は、まだ戸籍なんていう発想があるわけがなくて、江戸時代的な、それぞれの人が生まれ持った身分と属性に縛られている世の中です。生まれ持ったステータスがあるので、一部の例外を除いて就職活動なんて無いし、そもそも九割以上が農民ですからね、今みたいな「自分探し」なんてのもありません。「自分」はもう決まっているんです。納税にあたっては、家持と借家は別扱いです。京都なんて本場に厳格で、例えば家持の人がそこを借家にしようと思つたら、町全体の承認が必要なんです。しかも、その地代の何割かを町に払わないといけないのです。だから、今のマンション規制よりよっぽど厳しい世界なわけです。ちなみに明治時代の京都というのは確か持ち家率は三割代です。六割以上が借家でした。でも、竈は家持のお宅にも借家のお宅にもありますね。つまり、すべての戸という分かりやすい表現が竈で、家持・借家の区別なくすべての戸がお金を出しましょう、というのが竈金なんです。これは当時としては非常に画期的です。江戸時代は直接納税していなかった借家の人も竈金は払おうね、ということですから。これは江戸時代の発想にはないんです。江戸時代の発想でいうと、借家の人は家主に出すんです。それで家主がまとめて払うんです。だけれど竈金は、借家の人も払う。これが「戸別に」ということですね。ちなみに戸籍法ができるのは明治四（一八七二）年ですから、竈金の方が戸籍法より早

いんです。

ただし、竈金には例外があります。華士族は出しません。というのも、華士族は番組小に通わないからです。番組小はあくまで平民の学校です。平民が、家持・借家にかかわらず半年ごとに一分の出金、現在の約二五〇〇円を負担します。ちなみに華士族も明治四年から番組小に通うようになるので、そうなったら竈金を出します。

すべての戸から、となるともちろん、出資できない戸が出てきます。では、出せないところの分は、どうするか。町または番組内で肩代わりします。これは、今は肩代わりというところとすぐ肩身の狭い思いをしますが、当時は平気だったと思います。江戸時代に金の貸し借りなんて日常茶飯事ですし、家の格と言いますか、だいたいどの家がかんぐらい持つてゐるっていうのも、近所や親族はわかっています。なので、明治初年はまだ江戸時代の延長のような世の中ですから、小学校の学費も、京都の学校は勝手に家のレベルで小学校の授業料を変えています。それは授業料の徴収書が残っているのだからですが、相互扶助というのは、むしろ当時の人たちにとっては当たり前なんですね。今はこんなに殺伐として、生活保護を受けていたら肩身が狭い、バッシングされる。江戸時代の人が聞いたら「はあ？」って言いますよ。もらっておけよみたいな、そんな世界です。ともあれこの竈金、先ほどお話しした学区制度が始まってからは、学区市税になります。何なのかと言うと、市税を取りますよね、その市税の内の一部分を、学区にプールする形です。学区で自由に使うと、学区にしてくださいということにするわけです。これは学区制度が廃止になるまで続きます。

話を戻しましょう。払えない人がいるとはいえこの竈金、額が結構安いと思いませんか。お住いの場所によっては、今の町内会費より安いですね。これだけで学校が本当に運営できるのか、という話です。まあ、無理ですね。では竈金とは一体何なのか、ということになります。

そもそも、なぜ少額ずつ全員から取るのか。集める側としては正直大変ですね。それを、しかもずっと続けているわけです。なぜだろうって考えて、ある時、自分の身に置き換えてみたんです。少額でもお金を出すと、その使い道って結構になりますね。例えば、このホワイトボードを作るのに五十人が三百円ずつ出して買ったとしましょう。そうなると、やっぱりこのホワイトボードがどこでどう使われるか、気になってしまふんです。三百円なんて、電車でここから名古屋駅まで行けるか行けないかといったぐらいの額です。だけれど、どう使われたかが具体的にわからないと、気になる。そのくせ、夜の飲み会で五百円の生中を注文するのは平気です、っていうかその後の食べ物・飲み物の金額なんていちいち計算しない。自分で何のために使うのかが分かっている出費は、気にならないんです。その逆で、町内会費のような額でも自分が出したらそのお金がどうなったのか気になるし、お金を出した先に注意が向いて、「自分の」という意識が出る。逆に言ったら、どんなに小さい額でもいいから出させたら、全員注目してくれるんですよ。これが全員から集金するメリットなんじゃないでしょうか。お金を少額でもいいから取る、ということなんです。この役割があるからこそ、学区市税として生き残ったんだろうと思いますし、その学区市税を払い続けることによって、学区の人たちには「自分たちの学校」意識があり続ける。だから、学校が閉校して二十年以上たっても、元校舎のグラウンドで学区のお祭りや運動会をやったりするわけです。

では、番組小の運営資金が竈金では足りないとして、他にどうするか。基本、寄付金に頼るわけです。地域の人がもう本当に、何回も何回も学校に寄付するんですよ。他にも、町単位での寄付、新任学校長の寄付。うちの収蔵庫にある明治期の寄付台帳を見ていたら、本当に様々な人がいろんな額の寄付を、不定期で行っていることがわかります。

あと、興味深い試みとして、小学校会社というのがあります。これは簡単に言うと、学区の資産を運用するため

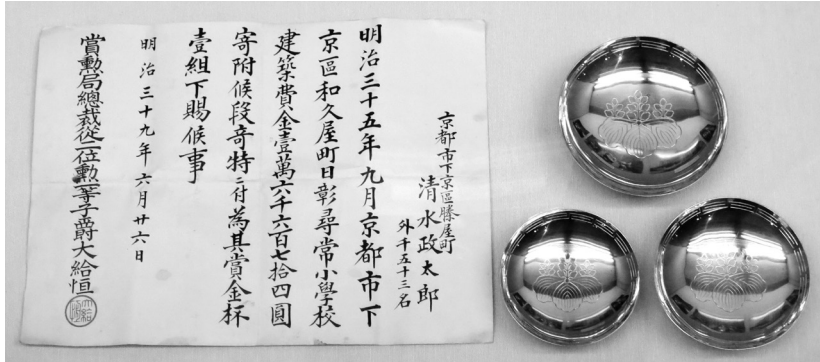
の、学区単位での商社または金融機関の事です。ただ、学区ですから単位が小さいです。当時としては大体千戸、四千人から五千人です。こんな小さな単位に銀行をつくっても、もつわけがないんです。今の京都銀行のATMより多くなってしまうですね。ですから、これは結局失敗するんです。ただ、失敗するプロセスが興味深くて、例を見ていきます。下京十四番組、のちの修徳学区というところでは、貧しい戸の竈金を免除して、その分を小学校会社の利潤で埋め合せています。上手いこと自分たちでやり繰りしているわけです。本当に自治とはこういうものなんだと、お上に頼らず自分たちでやっていくことなんだと、そう思います。ただ、繰り返しになりますが、長続きしませんでした。ちなみに、小学校会社の金庫が博物館に展示してあります。「なぜ学校の博物館に金庫があるんですか」、こういう質問がきたらニヤリとするわけです、よくぞ聞いてくれました、となります。この写真(写真⑤)、ちょっと見づらいのですが、

左のほうに「会社」と書かれています。

明治期の学校の運営を考える上で、よく忘れられているけど絶対忘れてはいけないことがあります。明治時代の小学校は、十数年単位、早い時は数年単位で、増改築や移転が行われます。つまり、動的なんです。どういうことかという、今われわれは小学校というのは、できたらもうずっとそこに何十年もあるものだとイメージしますね。例えば、南山小学校があそこにできた、十何年あそこにあります。明治の小学校は違うんです。何十年も同じ場所に同じ姿で続くことはありません。なぜかという、例えば番組小の最初の校舎は百平米程度です。今で言う、四人か五人家族の二階建て一軒家くらいの広さですね。



写真⑤



写真⑥

この校舎、就学率上昇で、数年ですぐに入りきらなくなって、以後、増改築や新築のラッシュがきます。長い目で見ると人口増加も進むので、この増改築と新築は、昭和十（一九三五）年ごろまで続きます。明治二年から昭和十年までといったら、足かけ七十年弱ぐらいあります。その間、増改築・新築ラッシュが続いていきます。最終的に昭和十年前後に校舎が鉄筋化され、ひと段落です。その頃の校舎はまだ京都にいくつか残っていて、その建築費用は原則として学区負担なんです。学区内の寄付金、それから積立金、あとはいざとなったら集金します。こんな具合に小学校が動的に、膨張を続けるんです。

面白い資料があります。これ（写真⑥）は明治三十五年と最初のところに書かれています。京都のど真ん中にある日彰学区にっしょうというところで、校舎新築の費用を学区で集めたら、とんでもない額が集まった。それで賞勲局という国の機関で、あなたたちすごいねということで金杯を三つ授けられることになったんです。つい何年前まで、学区の方たちが年に一度、この金杯でお酒を飲んでいたらしいです。これは評価額が軽く百万円を超えますから、酒を飲んだ後に貸金庫に戻すんです。でも金庫の費用も馬鹿にならないので、自治連合会の方に「博物館に入れたら保管してくれるか」とおっしゃっていたら、喜んで寄託いただいたものです。こんな絶好な学校史の資料

を収蔵庫に入れていてももったいないので、こうやって展示室に並べています。

六 番組小の在籍生徒と教育内容

次、教室の中のこと知らないといけません。なぜかというところ、地域が学校運営にどのような役割を果たしたのかとか、逆に学校が地域にとってどんな役割を果たしたのかというのを知ろうと思ったら、やっぱりどんな生徒がどんなことを学んでいたのかを知らないといけないわけです。なぜかというところ、何だかんだ言って学校というのは第一義的には勉強する場所なんですね。だから、これは地域史をやりたいと言ってきた学生によく言うんですが、地域史とはいえ学校について調べるなら、教育史をすっ飛ばしてはいけません。要するに、教育史の知識を最低限、たとえば何歳から何歳の子がいたのかとか、どんな教科書を使っていたのかとか、こういったことを理解した上で学校を調べる、学校に残る資料を使うということをやらないと、思わぬところに落とし穴ができてしまっていたりするんですね。学校史では、教育以外の学校の姿を探究するだけではなくて、従来の教育史研究が積み重ねてきたようなベースを持つことが必要不可欠なんです。

例えば番組小ではどんな子どもが学んでいたのかを見ようと思ったら、「小学校規則」を見なければいけません。番組小をつくるときにルールなしでは無理なので、最初の番組小ができる明治二年五月にギリギリ滑り込みでこれをつくります。そこに書いてある科目は、例えば書取りや作文を含む筆道、あとは算術、読書とあります。これは江戸時代の京都の学校そのままですし、毎月決まった日に儒書講釈・心学道話をやる、これも江戸時代そのままです。要するに江戸時代をそのままスライドさせた姿が初期の番組小の教育内容なのです。

小 学 課 業 表				
術 算	字 習	誦 讀	誦 讀	誦 讀
算術 <small>開立算問 開手算問 開手算問 開手算問</small>	習字 公用文 即題手束 <small>世帯十字文 諸券状 諸券往來 文</small>	誦讀 外國里程 外國里程 <small>外國里程 外國里程 外國里程</small>	誦讀 萬國公法 萬國公法 萬國公法 <small>萬國公法 萬國公法 萬國公法</small>	誦讀 日本外史 日本外史 日本外史 <small>日本外史 日本外史 日本外史</small>
算術 比例法 比例法 <small>比例法 比例法 比例法</small>	習字 私用文 私用文 <small>私用文 私用文 私用文</small>	誦讀 帝國年 帝國年 <small>帝國年 帝國年 帝國年</small>	誦讀 五子 五子 <small>五子 五子 五子</small>	誦讀 國史界 國史界 <small>國史界 國史界 國史界</small>
算術 除法 除法 <small>除法 除法 除法</small>	習字 京師明名 京師明名 <small>京師明名 京師明名 京師明名</small>	誦讀 國名 國名 <small>國名 國名 國名</small>	誦讀 論語 論語 <small>論語 論語 論語</small>	誦讀 職官 職官 <small>職官 職官 職官</small>
算術 加法 加法 <small>加法 加法 加法</small>	習字 支數 支數 <small>支數 支數 支數</small>	誦讀 五十韻 五十韻 <small>五十韻 五十韻 五十韻</small>	誦讀 考中 考中 <small>考中 考中 考中</small>	誦讀 考中 考中 <small>考中 考中 考中</small>

写真⑦

象徴的な教科書で、この翌年に学制が出てからは全国で使われます。だから、これは明治二年から四年の小学校規則とは、結構違うわけです。これだけ急スピードで開化が進もうとします。特に句読を見たら、上の右から三つ目、『万国公法』があります。これなんかは代表的な翻訳書なわけですよね。さらに誦讀のところを見たら、『外国里程』というのがあります。これは世界地理です。とにかく世界のことを小学校で学ばせようと考えられています。結局、生徒がほとんど誰も一等に到達しないうちに学

面白いのが、教育内容には地域は一切口を出しません。明確な線引きをします。「小学校兼町組会所」なのですが、小学校であることと「町組会所」であることというのは、ごちゃ混ぜではなくて、線引きがきれいにできているんです。

明治四年九月になると元下級武士の子どもたちも学校に入ってくるようになるので、そのタイミングで府が小学課業表（写真⑦）を出します、日本初の小学校用の課業表です。この小学課業表の内容にはかなり西洋の影響が見られます。句読・誦讀・習字・算術なんですね。要するに今でいう国語的な内容が、筆道しかなかったのが、句読と誦讀、二つに分かれます。五等から一等で、試験を受けて上の等になるの制度が導入されます。教科書は、上の等に行くのと翻訳教科書が出てきます。翻訳教科書は、文字通り西洋の本を翻訳した教科書で、文明開化の時期に

校制度が変わってしまうので、『外国里程』はほとんど使われなかったと考えられますが、かなり開化主義で教育をしようとしていたことがよく分かります。何と習字のところを見たら、英語とドイツ語が出てきます。小学校ですよ。やらせようとしたんです。だけれど、これも実際にはやっていません。教科書すらほとんど発行されていません。三年後に採用された国の小学校制度には外国語を学びなさいとは書いてありませんから、結局やる機会はいまま終わります。

ちなみにこの課業表、京都以外でも使われます。大坂、岐阜、愛知、筑摩。筑摩というのは長野の真ん中のほうですが、こういった地域でこの課業表を取り入れたらしいのですが、確認まではできていません。たぶん、ここに岐阜、愛知と出てくるのは、先ほど言った義校で使ったんだと思います。

しかし、課業表はあくまで「教える予定」段階のことしかわかりません。実際に各学校で教えようとしたのか、そして実際に教えたのかどうかまでは、単に課業表に書かれていたというだけでは実証できないのです。

可能な限りで実態を見てみましょう。明治五年の番組小在籍者のうち、何と課業表にあった五等から一等の生徒は全体の八%ぐらいで、未検生がほとんどです。要するに先ほどの課業表を使う生徒は、全体の一分以下です。では未検生は何をするのかというと、江戸時代以来の、先ほど言った書き・読みをやっていたとしか考えられないんですね。なので、この課業表を見て、「当時の小学生はこんなことまで勉強していたのか！」って考えるのは間違いで、一部の例外的な小学生だけが学んでいた、ということなんです。次、男女比です。明治五年、番組小在籍者のうち、男子が九〇〇〇人、女子が七七〇〇人、これはもう全国ではあり得ない数字なんです。というのも、全国に比べて女子の比率が圧倒的に高いんです。全国では、明治十年になって小学生の女子比率は二十%台なんです。要するに男子が七割以上を占めてしまうわけですね。京都というのは女子の就学率が圧倒的に高いんです。

では、どうやって教えられていたのか。福沢諭吉は「京都学校記」という短文を書いています。ですが、それを見ると、番組小は男女別学であって、集団授業ではなくて手習い方式、つまり寺子屋方式の個別指導であって、一方で十五名から十八名程度の講堂での講義もあつたことがわかります。あと八時始業で十六時終業、各学校に七十から二百名ほどが在籍していたこともわかります。

ちなみに明治七年に国の制度に則つた等級制になつて、小学校が上等、下等に分かれるのですが、ほとんどの子どもが下等で学んでいます。しかも京都の小学校の上等在籍者のうち、七四%が十二歳以上です。上等はもう、今日的な感覚で「小学校」とは言えません。明治時代の小学校教育制度というのは、すごく上までつくりますが、多くの子が上まで進まないという状況が明治三十年代まで続きます。

ということ、少なくとも明治十年頃までの京都の小学校で学んでいた生徒は、そのほとんどが現在の感覚からすると「高度」に思えるような内容を学んでいたわけではなかつたんです。学んでいたのは、ほとんどの子は近世以来の手習いの延長でしょう。

でも、目線を地域に移すと、このことは、実は地域のコミュニティセンターとしての番組小という役割でいけば、当然のこととなるんじゃないでしょうか。つまり、教育内容は府や国にあまり振り回させることなく、結果として地域の要望に依っていたということになるんです。例えば、当時の国が指定した読本の教科書はイソップ物語です。イソップ物語をつい最近まで江戸時代の庶民だった子どもが読んでも、何の役にも立つわけですね。国はそれを本気でやらせようとしていたんだけど、そんなものはせずに、そんなものはせずにと言えるのは現存している教科書がやたらと使われた感が無いから自信を持つて言えるのですが、例えば『小学子弟心得草』という府がつくつた手習いの教科書はかなり使われたと考えています。これは名古屋でも使っています。こういった地に足の着

いた教科書を使って、実情に合った教育をしていたわけです。

おわりに

最後、まとめです。番組小は、運営資金などの面で地域が学校を支える一方で、学校がコミュニティセンターとして地域を支えていました。最近、「地域が学校を支えよう」「地域が学校に関わろう」ってのは、よくスローガンの言われます。コミュニティスクールの発想もまさにこれです。コミュニティスクールって実態は様々なんですけど、少なくとも京都市では学校運営協議会がかなり機能していて、地域の催しものとかでも貢献しています。でも、逆に「学校が地域を支える」っていうのも、非常に重要なんです。番組小の歴史は、このどちらかが車の両輪となって進んでいるんです。どちらかが途切れたら、たぶん早晩、もう一方も駄目になるんじゃないでしょうか。人間関係と一緒に、持ちつ持たれつが一番長く続くんです。なので、「地域が学校を支えます」だけではなく、「学校が地域を支えます」というのも必要です。そうしたら本当に「地域の学校」というのが出来上がっていくわけですね。これが一つ目のまとめです。

次、大人と子どもの立場の間、教育資金の醸金と教育内容の決定などの間に明確な線引きがなされていたということです。番組小には、いろんな人が出入りするので、結局それぞれの役割というか、線引き、要するに自分の領域以外には口を出さないというのは、ある程度しておかないとごっちゃになる。番組小が、姿を変えながらもずっと「地域の学校」として続いたのは、これをきちんとやっていたからではないでしょうか。

つまり、番組小のあゆみを学校史という視点から見たら、番組小は地域と学校の双方向的な発展が実現される一

つのモデルとして位置付けられる、ということなんです。

本日は当時の京都の姿も話して、京都の近代史の中に番組小を位置づけたいといけませんが、そんなことをやっていたら五時間コースになります。また機会があれば、ということではこれくらいにいたします。ちなみに今日お話しした内容の番組小に関するところはほとんど活字化されていますが、最初の「学校史とは何か」は今日が初めてです。

ということ、ご清聴ありがとうございました。

(終了)

※注は講演録を活字化するにあたってつけました。

註

(1) 二〇一八年四月に京都市立御所東小学校が開校し、現在は十一校になっています。

(2) 学区は元学区と言われることもあります、厳密には両者は違います。今までお話ししてきたような、自治の単位としての学区は、学校が開校しても正式名称に「元」をつけません。一方で、行政区の末端としての学区、つまり国勢調査や住民基本台帳の単位としての学区は、正式名称は「元学区」です。京都市で暮らしていて日常的に触れる学区は前者で、後

者に関わることはほとんどありません。「学区」と「元学区」の区域は、重なることもあれば、そうではないこともあります。

(3) 各学校がそれぞれ国家の法令に従って設置され、かつ「進学」を前提につながりをもった今日的な「学校」の広がりは、明治二十年代以降のことです。

(4) 今日の意味での「教育」の成り立ちについては、和崎光太郎「歴史学の方法論——学校の「威力」を論じることを

- 通して——』『歴史書通信』（第一三七号、二〇一八年五月、<http://www.hozokan.co.jp/rekikon/pdf/m237.pdf> 二一五頁）で概略的に論じています。
- (5) 川島智生（京都華頂大学教授）。
- (6) 宮坂朋幸は、従来の教育史研究を相対化する手がかりの一つとして、本稿で言うところの学校史の有用性を指摘しています（宮坂朋幸「学校の成立と子ども就学——教育の制度・政策を相対化する研究史——」教育史学会・教育史学会六〇周年記念出版編集委員会編『教育史研究の最前線Ⅱ——創立六〇周年記念——』六花出版、二〇一八年、四六一—五九頁）。
- (7) このように価値を見出された学校資料のことを、後日、「学校の文化資源」と捉えなおして、拙稿「学校の文化資源」研究序説——学校史料論の総括と展望——』『洛北史学』（第二十号、二〇一八年六月、二七—四五頁）で論じました。合わせてご参照いただけますと、より理解が深まるかと思えます。
- (8) 同様に、あくまで教育史研究であることわかって「学校史」を探究した優れた研究成果として、林正登「炭坑の子ども・学校史——納屋学校から「筑豊の子どもたち」まで——」（『華書房、一九八三年）があります。同著は、「アカデミズム教育史学」の批判者としての地域教育史（前掲「学校の文化資源」研究序説——学校史料論の総括と展望——」三九頁）であるという点で秀逸であり、しかもその内容は今日でも全く色あせていません。
- (9) たとえば、小山静子『家庭の生成と女性の国民化』（勁草書房、一九九九年）。
- (10) 京都市学校歴史博物館編、和崎光太郎・森光彦著『学びやタイムスリップ——近代京都の学校史・美術史——』（京都新聞出版センター、二〇一六年）。
- (11) 和崎光太郎『明治の〈青年〉——立志・修養・煩悶——』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）。
- (12) この章の内容については、主に前掲『学びやタイムスリップ——近代京都の学校史・美術史——』の一〇—二七頁も参照ください。
- (13) この章の内容については、主に拙稿「京都番組小学校の創設過程」『京都市学校歴史博物館紀要』（第三号、二〇一四年二月、三一—四頁）も参照ください。
- (14) 本章、次々章の内容については、主に拙稿「京都番組小学校にみる町衆の自治と教育参加——坪井由美・渡部昭男編『地方教育行政法の改定と教育ガバナンス——』教育委員会制度のあり方と「共同統治」』（三学出版、二〇一五年五月、七四—八七頁）も参照ください。
- (15) 二〇一六年九月四日の台風二十一号で破損したので、現在修復中です。
- (16) 児童と呼ばれるようになるのは明治二十年代からです。